

第9回作文コンクール

# 心のふれあい大賞

入賞作品集



**主催** 公益社団法人 福岡県医師会

**共催** 福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社

**後援** 九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会、北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社（順不同）

# 目次

主催者あいさつ……………1

## 入賞作品紹介

一般の部 最優秀賞……………M・S さん 2

一般の部 優秀賞……………坂本弥生 さん 4

中高生の部 最優秀賞……………樋口友里愛さん 6

中高生の部 優秀賞……………大神愛莉 さん 8

中高生の部 優秀賞……………守田妃来 さん 10

中高生の部 優秀賞……………笹淵美樹 さん 12

小学生の部 最優秀賞……………伊東来良 さん 14

小学生の部 優秀賞……………元山愛莉 さん 15

小学生の部 優秀賞……………下川琴弓 さん 16

小学生の部 優秀賞……………松岡夏希 さん 17

選考委員……………18

募集要項……………19

# 主催者あいさつ



公益社団法人 福岡県医師会

会長 蓮澤 浩明

福岡県医師会作文コンクール「心のふれあい大賞——わたしのまわりの医療体験」は、医療従事者と患者、そのご家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて、その体験記を募集するもので、九回目を迎えました。

本年も、小学生から一般の方まで合計一七五点ものご応募を頂き、一般の部・中高生の部・小学生の部から最優秀賞、優秀賞あわせて十名の方を、表彰させていただきました。

コロナ禍における4回目のコンクールとなった今回の応募作品も、新型コロナウイルス感染症を通して感じたことや、その経験を経て改めてもたらされた気づき、いのちや人とのつながりの大切さなど、感慨深く心打たれる内容が多く寄せられました。

様々な行動が制限され、交流の場がなかなか持てなかったコロナ禍において、このように皆さんの体験や想いを共有することは、我々医療者にとっても重要であり、この作品集が多くの方々目の目に触れることで、医療に対する関心や、県民の皆様と医療従事者との絆がさらに深まっていければ幸いです。

今回も、残念ながら表彰式の開催は叶いありませんでしたが、受賞者の皆様に心よりお祝い申し上げますとともに、ご応募いただきました皆様、またご支援賜りました関係者の方々にも厚く御礼申し上げます。本冊子では、受賞者の作品を紹介させていただきますので、ぜひご覧ください。



一般の部

## 最優秀賞

筑紫野市  
M・S「温かい医療に  
守られた娘の日々」

娘は、生後四日目に大きな手術を受け、命をつなぐことができました。先天性の心臓疾患があったのです。当時の最先端の医療の技術により、命を助けていただきました。その日から娘にとって医療は、生きるためになくては

ならないものになりました。

手術が終わって娘は、約三か月間NICUでお世話になりました。母乳を冷凍して届けることしかできない私に代わって、看護師さんが毎日抱っこして母乳を与えてくださいました。私の代わりに優しく語りかけてくださいました。ガラス越しでしたが、側まで抱っこして連れてきてくださいました。主治医の先生は、術後の経過について詳しく教えてくださいました。

主治医の先生、看護師さん方、多くのスタッフの皆さんのお陰で、三か月後元気に退院することができました。ようやく自分の手で抱っこして、家に連れて帰ることができました。ただし、心疾患が根治したわけではなかったのです、定期的に診察に通っていました。娘が三歳になったとき、二回目の手術を受けました。心臓に空いた二つの穴をふさぐ手術です。娘にとってはとても大きな手術でした。医療スタッフ

の方々がチームを組んで、全力で手術に挑んでくださいました。お陰で十三時間にも及ぶ手術を、娘は乗り切ることができました。手術後母親と離れてのNICUでの生活のストレスでなかなか食事を受け付けなかった娘のことを思って、主治医の先生が、少し早くNICUから一般病棟に移してくださいました。個室まで用意してくださいました。この時娘はすっかりお医者さんや看護師さん嫌いになっていました。主治医の先生や看護師さんが話しかけてもプイと横を向いて避けるようになりました。それでも主治医の先生も看護師さんも笑顔で優しくお話ししてくださいました。お陰で術後の経過もよく、ご飯も食べられるようになり、二か月間の入院生活を経て、無事に退院することができました。また、命をつないでいただきました。それまで、一、二段上っては座り込んでいた階段も上れるようになりました。

一年生になって、定期検査で心臓の弁に異常があることが分かり、夏休みにまた、手術を受けることになりました。

この時は、ずい分娘も成長していて、主治医の先生や看護師さんを嫌うことはありませんでした。むしろ、手術の執刀をしていただいた先生を大好きになりました。先生は鼻の下にお髭を貯えてあったので、娘は先生を「お髭の先生」と言ってお気に入りでした。娘の初恋でした。先生も優しく相手をしてくださっていました。担当の看護師さんのことも大好きになりました。看護師さんの仕事に興味をもって、「看護師さんには、どんな仕事がありますか。」「看護師さんにはどうしたらなれますか。」と、入院している間、何度も質問しました。看護師さんは、毎回優しく答えてくださいました。お陰で、退院後は遠足にも歩いて行けるようになりました。

定期検査で病院を訪れるときには、

いつもお髭の先生を探して、会えるとても喜んでいました。

娘は、三歳の手術の時に、お腹にペースメーカーを入れました。五年生の時、ペースメーカーの入れ替えの手術を受けました。一年生の時の、お髭の先生が執刀してくださいました。五年生になって少しお姉さんになっていたので、お髭の先生に話しかけると、少し恥ずかしそうにしていました。

定期検査を受けながら、元気に過ごしていた娘が、十九才の夏、突然倒れました。心肺停止でした。何が起きたのか分かりません。救急搬送されて一命は取り留めましたが、意識が戻らなまま主治医のいる病院に転院しました。主治医の先生や看護師さん、お髭の先生が迎えてくださいました。

意識のないただ寝ているだけの娘に、先生も看護師さんもまるで娘と会話しているように、毎日話しかけてくださいました。話しかけながら体をふき、

話しかけながら顔や髪を洗い、「今日のパジャマはかわいいね。」と、着替えさせてくださいました。前髪をはりのかわいい編み込みにもしてくださいました。娘も喜んでるように見えました。二十歳の誕生日には、みんなで歌を歌ってくださいました。成人の日には、着物を着せることを許可してください、少し体を起こして記念写真を撮ってくださいました。私は、涙が止まりませんでした。意識があったらどんなに喜んだらろうと思いました。それが叶わないのが残念でたまりませんでした。

それから、三か月後、倒れてから九か月後、娘はこれまで二十年間お世話になった、命をつなぎ続けてくださった病院で、優しい先生や看護師さんに見守られながら、短い人生を終えました。娘はきつと「みなさんありがとう。」と、笑顔で旅立って行ったことでしょう。



一般の部

## 優秀賞

北九州市  
坂本 弥生「義父と過ごした  
最後の日々」

三年前、義父が六年間の闘病生活を  
経て八十九歳で亡くなった。九年前に  
左足の悪性腫瘍が見つかり、手術、三  
年後の再発、重粒子線治療を経て一時  
は腫瘍も消滅していた。

その後、脳梗塞や転倒による硬膜下血腫を患い、最後にお世話になるT病院の一般病棟に入院した。腫瘍の手術で医療センターに入院していた当時は義父もまだ穏やかで看護師さんからも「坂本さんは優等生だ」と言われたと喜んでいた。しかし、この頃になると頑固で怒りっぽくなり、自分でも「前は我慢できていたことも我慢できなくなった。これもボケの一つの症状だろうか」というほどであった。看護師さんにも険しい表情で文句を言うこともあり、そんな時、私は申し訳なくもあり、それでも優しく接してくださいと看護師さんたちに頭の下がる思いであった。しかし、本当は義父にも看護師さんの思いは通じていたのである。

さんが往診に来て下さった。そして、退院直後の検査で再びの再発が分かった。「高齢なので手術も無理である。今後は緩和ケアに移行しては」と言われ、紹介書を持って病院にご相談に行った。先生とのお話が終わり、会計のため長椅子に座って待っている、往診時に一度だけお会いした看護師さんが事態を聞いて心配して来てくださった。「このまま悪くなるのを待つだけという気持ちにはさせたくない。気休めでいいので副作用のない治療法はないだろうか。」と言う私の横に座り、あれこれと助言して下さった。

結局、老人ホームで三か月間過ごし、痛みや食欲不振のため緩和ケア病棟に入院することになる。そこは、病院の最上階にあり、まるでホテルのような暖かみのある空間だった。入院前はベッドに寝ていられないほどの背中や脚の痛みがあったが、熟睡できるようになった。体が前屈してすっかり座る



ことができなかつたが、背筋を真っ直

れたのではと思う。

ぐ伸ばして座れるようになった。食欲

そんな状態でも緩和ケア病棟では頻

も戻ってきた。入院して一か月後に義

繁にお風呂にもいれてくださった。食

母の十三回忌を予定しており、それに

事も流動食であつてもおいしそうに作

向けて元気になるというのが義父の一

られていた。アイスクリームなども添

つの目標でもあつたが、それにも参加

えられていた。過剰な輸液はしないと

することができた。これが最後という

説明を受けていたので、いよいよ水分

思いがあつたかどうかは分からないが

も取れなくなつたとき、あと数日かと

親類にも挨拶することができた。その

覚悟をしたが、義父は体中の水分を

ころが一番体調がよく、一時退院も検

使つて、それから一週間生き抜いた。

討したほどであつた。しかし、その後、

亡くなつたときは、脚の腫れさえ引い

痛みが強くなり、退院は叶わなかつた。

ていた。

先生からは「残された時間が日にち単

亡くなる数日前のことであつた。も

位となりました」と言われ、これから

う声は出なくなつていたが、一時的に

予想される容態の変化やそれに対する

意識が正常にもどつた瞬間があつた。

対応の説明があつた。看護師さんから

その時私に、「私はもうダメだ。あな

は「旅立ちのお洋服を用意してくださ

たはOK! OK!」という仕事を繰り返

い」とも言われた。その後、先生に言

返した。自分勝手な解釈ではあるが、

われた通り、せん妄の症状が出た。義

何一つ十分なことができなかつた私に、

父は仕事で電気工事をしていた頃の記

「あなたは良い嫁だった」と最後に過

憶の中にいた。考えようによつては、

分な言葉をもらえたのだと思いたい。

せん妄によつて死への恐怖から逃れら

亡くなる日の夕方、看護師さんが下

がった血圧を測りながら、「坂本さん、

楽しかったね。」と涙ながらに話しか

けてくださった。また、「亡くなつて

も慌てて私たちを呼ぶ必要はないです

よ。しっかりとご家族でお別れをしてか

ら呼んでくださいね。」と言われた。

そして、その夜、義父は旅立つた。

亡くなつて三か月後と一年後のこと

だつた。看護師さんから手書きのお手

紙をいただいた。義父を忍ぶ温かい言

葉が綴られ、「もし、悲しみて何も手

につかないような状態があればご相談

ください。」とあつた。大切な人を亡

くして鬱状態になるご家族もいること

に配慮しての病院の取り組みであろう。

家族にまで心を砕いてくださることが

ありがたかつた。最後にその時に返信

した言葉を再び述べたい。

「十分な看護をしていただき、私た

ちも心残りなく見送れたので大丈夫で

す。」と。



中高生の部

最優秀賞



北九州市・高校2年  
樋口 友里愛

## 「一つの病気と

## 闘うチーム」

父は私が小学二年生の時に天国へと旅立った。膵臓がんだった。

父の病気が見つかった日を私は今でも鮮明に覚えている。その日、父と母は一緒に病院に行った。そして両親は

家に帰って来るや否や深刻そうな表情で私に話があると言った。私はその普段とは違う表情や声のトーンから嫌な予感がした。そしてそれは見事に的中し、「パパね、膵臓がんっていう悪い病気が見つかったの。」と母から伝えられた。その瞬間、私の頭の中は真っ白になり、何も考えることができなかつた。私は普段から父と医療系のドラマを見ていたため、幼いながらその病気が恐ろしいものであることを感じてた。そんな私の姿を見かねた父は私にこう言った。

「心配するな。すぐ治るから大丈夫だぞ。」

私はその言葉を聞いた途端に涙が溢れてきた。それからすぐ父の入院生活が始まった。

休日の日、私は母とお見舞いに行つた。病院に着くと看護師さんが私に「こんにちは」と毎回挨拶をしてくれた。

私は次第に看護師さんと仲良くなった。

父のお見舞いに行くたびに学校での出来事や、家族との思い出を父と看護師さんに語っていた。帰る時間になると看護師さんが「また今後、お話聞かせてね」と優しく言い、病院の出口まで一緒に降りてくれた。数か月経って、父の退院許可が下り、私はまた父と一緒に家で暮らすことができた。父は私と公園に行つて遊んでくれたり、ご飯を作ってくれた。何より嬉しかったことは、小学校の運動会を見に来てくれたことだった。しかし、このような楽しい日々はずっとは続かなかつた。

父の容態は悪化し、また入院の日々が続くようになった。お見舞いに行く時、父はたくさんの機械に繋がって治療を受けていた。その姿を見て私は父の容態が悪化していることを感じて泣いていた。すると、看護師さんが来て私にこう言った。「お父さん、今、病気が闘ってるからね。お父さん強いから大丈夫。」そう言つて私を安心させ



てくれた。

それから間もなく父は再び退院の許可をもらえた。父がまた家に帰ってきた。私はまた遊びに連れて行ってもらえると思うと嬉しくてたまらなかった。しかし、そうはいかなかった。父は前みたいに元気に動くことはできなかった。だが父は家の中で遊んでくれたり、散歩に連れて行ってくれたりした。私はそれでも十分嬉しかった。そして私は父が早く良くなりますようにと毎日願っていた。

更に月日が経ち、小学二年生の一月頃だった。ある朝、家の中が騒がしく私は目が覚めた。なんだろうと思ったりビングへ向かった。すると、そこには見たことのない人が三人いた。救急隊員の方だった。私は父の容態が急変したことに気づいた。父は搬送された。母も父と一緒に救急車に乗って行った。私と兄と弟は三人で家で待っていた。朝ご飯を食べていると電話がかかって

きた。母からだった。そして母はこう言った。「タクシー呼んだから三人で乗って病院まで来て。」と。四年生の兄に連れられ私と弟はタクシーに乗った。私は父にもしものことがないか心配で怖かった。

病院に着くと玄関で母が待っていた。私たちは母についていった。すると、そこにはベッドに横たわっている父の姿があった。ベッドの周りに置いてあった椅子に座った。父の顔を見ると、顔色が悪かった。すると、横にいた母が私たちに泣きながら言った。

「パパ、頑張ったよ。」

私と兄は状況を理解した。私は頭の中が真っ白になった。信じられなかった。私も母も兄もみんな泣いた。三歳だった弟も私たちの姿を見て泣き始めた。

少し落ち着きを取り戻した私は外のベンチに座っていた。すると、看護師さんが私の隣に座り、話しかけてくれ

た。「お父さん強かったよ。泣いたりしなかった。泣いてたらお父さん心配するよ。」そう言って私の涙を拭いてくれた。

「お父さんずっと空の上から見守ってくれるから大丈夫。」その看護師さんの言葉は今でも私の支えになっている。

父が病気になり、私たち家族は長い期間、医療従事者の方々と関わってきた。父の病気を少しでも良くしようとする様々な治療法を考えてくれた医師の方。毎日、父のサポートをしてくれた看護師の方。そして、病院で働くたくさんの方。それらの医療従事者の方が父を救おうと一つのチームとして父の病気と向き合い、全力を尽くしてくれた。また、父の病気を治すだけでなく、父と私たち家族が少しでも安心できるように最後まで私たち家族と一緒に闘ってくれた。私は今でもその方達に感謝の気持ちでいっぱいである。



中高生の部

優秀賞



福岡市・中学2年  
大神 愛莉

## 「おじいちゃんの手」

私の祖父は今年の八月で八十歳です。孫の中で初めての女の子だったので、とても可愛がってもらいました。運動会や催物、年に二回の発表会のたびに必ずビデオ撮影をし、何時間もパソコンの前に座って編集してくれていたの

を覚えています。そのビデオを家族で見、みんなで感想を言い合うのは楽しかったです。

祖父が初めてスマホを買った日、私との写真を待ち受け画面に設定しました。それを数年経った今でも待ち受け画面にしています。また、食事の時に納豆をどれだけ混ぜられるかという競争をしたり、家中にたくさんの電球のスイッチをつけ、廊下を季節外れのイルミネーションで飾る楽しい祖父です。

そんな祖父が、三年半前に体調を崩しました。病院でいろいろな検査をするとステージ4の癌であることが発覚し、手術ができなかったため抗癌剤治療を選択しました。治療のため入退院を繰り返していたので、私も行ける時はできるだけお見舞いに行くようにしていました。

しかし約二年半前、新型コロナウイルスが世界的に流行しました。それからは行動制限がかけられ自由に祖父と

会うことができなくなりました。コロナ禍になって、入院しても誰とも会えない日が続き、祖父はずいぶん心細く、寂しかったのではないのでしょうか。実際に私もコロナ禍になってからは数回しか会っていません。今年に入って徐々に病状が悪化し、五月に緊急入院しました。その二週間後には、癌患者さんの癌性疼痛などを緩和し生活の質を向上させながら治療をする、緩和ケアの病院に転院しました。コロナ禍なので面会是一日二人、二時間だけという制限がありました。祖母と母が主に面会に行っていて私は二度行く機会がありました。久しぶりに会った祖父は少し痩せていて、会話もゆっくりだったけど「いつものおじいちゃん」でした。手を握ってたわいもない話をしました。その後家族にはあと数日かもしれないということが告げられました。次に会ったのは二週間後です。その時にはすでに意識がなくなっていました。

看護師さんが

「意識はなくなっても耳は聞えているんだよ。」

と教えてくれたので私は祖父の耳元でたくさん話しかけました。もしかしたら、これでもう「おじいちゃん」に会えなくなるのではないかと思って、胸が苦しくなりました。すると、看護師さんが

「後でおじいちゃんの手、一緒に洗いましょうか。」

と声をかけてくれました。手洗いの準備をして、「おじいちゃん」の手をそっと、洗いました。今までこの手で私を抱っこしてくれたり、ビデオを撮ったり、遊んでくれた優しい手なんだなと思つて丁寧に洗いました。私はこのことは絶対に忘れないと思います。

その翌日に祖父は旅立ちました。八十歳になるまでは生きられなかったのです。

人は死を目の前に突きつけられると、

五つの段階を経て、死を受け入れるとされています。アメリカのキューブラー・ロスという学者が、五段階の順に、「否認」「怒り」「取引」「抑うつ」「受容」を提唱しました。

「重い病気にかかった時に、そのことを決して認めない。事実だとわかってくると、怒りを周囲に向けるようになる。それでは解決できないことを知ると、神仏や奇跡に縋ろうとしたり善行をして死を免除してもらおうとする。すると徐々に諦めの感情が芽生え、何も手に付かない抑うつ状態に陥り、最後には死を避けられないものとして受け入れ、心に平穏が訪れる」

というような心の変化があるそうです。後から聞いた話ですが、祖父は最期まで痛み止めを拒否したそうです。

痛み止めをすると意識がなくなると思つたようです。でも家族は苦しんでいる姿を見たくないので痛み止めを使用してほしいと思つていました。そこで

医師が、痛み止めを使用しても意識はなくならないこと、痛みがとれると生活の質が高まることなどを説明してやつと受け入れてくれました。祖父が受け入れてくれたことで痛みがとれて、家族との時間ができたのだと思います。この五段階は患者さんだけでなく家族にも起きるそうです。私はずっと死んでほしくないと思つてお祈りしたり、勉強や部活を頑張つてみたりしましたが、でも、私はあの看護師さんの一言があつたことで、祖父の「死」を受け入れることができたのだと思います。

その看護師さんは死後の処置の後、私が最後のお見舞いの時に持つて行った花束を祖父の顔の横に置いてくれました。それを知つてとても嬉しかったです。

コロナ禍で面会ができないこともある今、少ない時間だったけれど祖父との時間を過ごせたことは私の人生の糧になると思います。



中高生の部

優秀賞



福岡市・中学3年  
守田 妃来

## 「最悪から学ぶこと」

「最悪だ。」

私の頭の中で、この言葉がリピートしつづける。それと同時に、多くの責任と後悔が押しかかってくる。あの時走らなければ。もっと早めに病院に行っていたらよかったのに。早くて全

治三カ月、手術のために一週間程度入院しなくてはならないと聞いた時、我慢していたはずの涙があふれ止まらなかつた。

六月一日。体育祭まで残り二日という日。私は、全日予行（競技などすべてを通して行うもの）の最終種目の「ブロック対抗リレー」の最中、残り百メートルカーブで「ゴキッ」と言う音とともに骨盤に激痛が走った。どうにかバトンはつないだものの痛みがあまり動けない。冷やしても全くおさまらない。今までに感じたことのない恐怖と焦りを覚えた。

学校からの連絡を受け、仕事から戻って来た父と一緒に、父の勤める病院へと向う。レントゲンを撮り、念のための血液検査も行う。新しい体験をする興味の気持ちがあったものの体育祭に参加出来るかどうかの不安が募っ

ていく。

私は、黄色のブロック団長。中二の冬、友人のすすめで志願した。意外にも志願した人は多く、投票で決めることに。私はみごと当選し、信頼できる仲間をゲット。高校生との交流も日に増え、叱られることも多くなった。ブロックの人全員をまとめたり、チームのメンバーとケンカしたりと、大変ながら楽しく準備を進めていた。今ごろは、生徒会交えて今日の反省会をしているはずなのにな…どうしてこんなところなんか…。

先生と父がレントゲン室から出てくる。私の意識は一気に現実へともどされていく。私たちは二番診察室へと入る。換気扇の音だけが部屋に響いていた。

「骨折です。結構悪化しているので、手術するべきだと…一週間程度入院す

る必要がありますが、今日から…」

長い沈黙の後、先生は口を開いた。

私には意味が分からなかった。いや、

理解はしたが状況そのものを受け入れ

ることを拒否していた。頭が真っ白に

なり、何も考えられない。心の整理も

出来ないまま、入院することになった。

普通の骨折と違い、こけたり、ひねっ

たりしただけでは折れないものらしい。

負荷がかかることによっておこるもの

だ。部活で無理をしすぎたのだろう。

「手術は二日後です。その後はリハ

ビリを行います。一緒に頑張りましよ

う。」

心が追いつかない。そのせいか、行

き場のない怒りがすべて主治医の先生

へ向かってしまった。

「一緒にって何ですか。先生たちは

痛くないし、怖くないじゃないですか。

私は体育祭参加できるんですか。今ま

で頑張ってきたんですよ。」

我慢していたはずの言葉が全部もれ

た。同時に涙もあふれてきた。

「大丈夫。手術は僕がやるから怖く

ないし、看護師さんもみんな親切だよ。

体育祭は競技することは出来なくても、

一時退院で見に行けるよう、調整する

から。安心して。」

先生は私の欲しかった言葉を全部

言ってくれた。「大丈夫」「安心して」

がこんなにも安心できる言葉だと初め

て知った。

手術当日。麻酔は父がかけてくれた。

「大丈夫」この言葉が私を安心させ、

深いねむりへと入っていった。

目が覚めると、父がいた。手術が無

事に終わったことを伝えてくれた。父

が先生を呼ぶと、私は感謝と謝罪を何

度もした。

「誰でも不安になる。でも、あなた

のお父さんや看護師さんたちが支えて  
くれていることを忘れないでね。」

私の不安だった気持ちは、すべて安

心へと変わっていった。

リハビリ中もたくさんの人に励まさ

れ、支えられた。最初の不安は嘘のよ

うに消えさり、笑顔になった。

一週間の入院の末、私は退院した。

この一週間でたくさんのおおききことを学んだ。

普通に自分のことを出来る喜び。支え

られて生きていくありがたさ。人は一

人じゃなくても出来ない。人と人のつな

がりこそが、生きる糧となる。私たち

は一人ではない。つらい時や大きな壁

にあたった時は思いだしたい。

「私たちは一人じゃない、支えあっ

て生きている。」





中高生の部

優秀賞



北九州市・中学2年  
笹渕 美樹

## 「優しさのバトン」

私は、六八六グラムの超低体重児として生まれた。

私が生まれる前、母は入院中だった

が、突然の破水によって、七ヶ月で出

産することになってしまった。

この夏、初めて私の出生時の話を母から聞いてみた。同時刻に生まれた弟がいて、本当は双子の姉だった。

弟の名前は翔太。弟も小さく七一八グラム。母によると私たちは、生まれてたった一度だけか細い産声をあげ、呼吸が確認されると同時にすぐ呼吸器

を装着。手術室で母の頭もとに連れてきてくれたが、対面は一瞬だったらしく、温かい保育器にそれぞれ入れられた。私と翔太はNICUに急ぎ運ばれた。NICUの室内奥は薄暗く、色々な機械の光や音しか聞こえない静かな場所に私たちの保育器は横ならびにあったという。

通常の赤ちゃんの三分の一しかない

私たち。いつ急変するか何が起こるか

は分からない。母は先生方を信じ、見守ることしかできないから凍母（凍らせた母乳）を持って毎日会いに行っていたらしい。だが、面会を通じて、いい報告が聞ける機会は少なかったという。母は、当時の育児日記を見せながら話を進めてくれた。

お揃いの育児日記には、私たちの事がびっしりと書かれていた。中でも、翔太には数えきれないほどの危険な病状があり、毎日の面会での先生と話されていた記録があった。翔太が生まれてすぐに手術した事。初めて知ることばかりだった。母は、翔太がすごく大変な時でも毎日面会に行けたのは、私がゆっくりではあるけれど、穏やかに



過ごしそばにあった点滴の数が少しずつ減っていく良い兆しと何よりも主治医の先生や看護師の方が優しく接してくれ、心の支えとなってくれたと語っていた。

大変な手術を乗り越えた翔太だったが、六十日目の朝に亡くなった。母のおなかの中で七ヶ月、生まれてからはたった六十日しか一緒にいられなかったけれど、私のそばでいつでも見守ってくれているような感覚が私にはある。それから二ヶ月後体重も三倍にもなり退院の日を迎えた。

中学生になった私は、今でも夏休みに健診に行っている。これまで何度か入院や夜間の発熱で受診したこともよく覚えている。病状が辛くとも不安

な時でも知っている先生の顔を見ると気分が和らぎ検査も頑張ろうという気持ちさが不思議と沸いてきた。

夏の健診に行くと、先生は十四才になった私に向かって「当時の事を考えると、とても感慨深いな。」と話し、私は当時の記憶はないけれど本当にたくさんの人に支えられ、今ここに存在していると感じの気持ちでいっばいだ。翔太が亡くなったあの日から私は翔太の命も背負い、一生懸命に生きたいと感じている。

これまで多くの医療従事者の方々に助けてもらった私は感謝の思いを繋げていきたいと思っていて、その目標を達成するために、日々いろいろな事にチャレンジをし、最後まであきらめず

にやり遂げることがとても大切だと思っている。

いつの日か、先生たちが私に与えてくれるような安心感を、私も与える事が出来るように――。

小さく生まれた私が、大きな優しい気持ちをもらって成長出来た事に感謝し、これからはさらに大きな優しさに変えて次へリレーのようにバトンを繋ぎたい。





# 入賞作品

●小学生の部 最優秀賞 — 「人の力」

小学生の部

最優秀賞



福津市・小学3年  
伊東 来良

## 「人の力」

二年生の十二月、わたしは、学校に行く時交通事こにあいました。顔にぶつかつたので顔からたくさんちが出ていました。となりに住んでいるかんごしさんが顔からでるちをタオルでふいてくれました。きゅうきゅう車が来ま

した。きゅうきゅうたいは、わたしをベッドにのせて、わたしを、きゅうきゅう車の中にはこび、びょういんへつれていってくれました。はじめてのつたきゅうきゅう車の中はいろんなきかいがいっぱいありました。きゅうきゅうたいいんは、いろんなけんさと、わたしの体に、きかいをつけて、いました。びょういんについたら、おもしろさんと、かんごしさんが、わたしに、たくさん話をかけて、ケガした所をなおしたり、洋服をぬがして、キズの手当てや、けんさをしました。すぐこわかつたけど、やさしく話をかけてくれました。わたしも、いたくてないていたけど、お母さんも、お父さんも、妹も心ばいして、たくさんないていました。わたしは、はながおれていたので、手じゅつしました。手じゅつはますいでねむっていたのでおぼえていませんが、手じゅつのはとは、とても頭がいなくて、はいていました。かんごしさんは、いろいろなことをしてくれまし

た。おトイレやおふろにいられてくれたり、いつもやさしくしてくれました。はなにつめものをしていたので、くるしかったです。夜もねむれなくて、おもしろさんは毎日お部屋に来て、わたしが元気が見に来てくれました。毎日点てきがいたくていやだったけど、点てきのシールにねずこちゃんの絵を書いてくれてとても元気ができました。しょうどくがいやでまくらを高くしてくれたり、「えらいね、えらいね」ってほめてくれました。家族に会えなくてさびしかったけど、毎日電話してみんなの顔が見れたのがとってもうれしかったです。

今も、たまにびょういんに行つて先生に見てもらっていますが、いつも大きな声とえがおでお話してくれます。交通事こにあつて大へんだつたけどびょういんの先生やかんごしさんがなおしてくれたおかげでまた学校に行けるようになったので、わたしは幸せです。



小学生の部

優秀賞



春日市・小学2年  
元山 愛莉

## 「たくさんの先生とわたし」

わたしには、たくさんの先生がいます。なぜなら、りょう手をあわせた大ききくらいに小さく生まれたからです。わたしは、のうせいまひで体が思うようにうごきません。赤ちゃんのころ

から、うんどうの先生が足のうんどうや体のうんどうを教えてくださいました。ボールやトランポリン、たくさんのおうぐをつかっていっしょにあそんでくれました。先生が教えてくださいましたので、なわとびやかた足立ち、けんけんぱができるようになりました。

つぎに、目やゆび先の先生がいます。赤ちゃんのころはビー玉やおはじきをつかむれんしゅうをしたり、ボタンやチャックのやり方を教えてくださいました。ようち園のころになると、おりがみやぬりえやつみきなどをつかっていっしょにあそんでくれました。小学校に入ると、文字をバランスよく書けるれんしゅうをしたり、目のれんしゅうをして学校のおべんきょうについていけるように教えてくださいました。

ほかにも、わたしはせいたいまひで大きなこえが出ません。たべものやのみものをじょうずにのみこむことが出きませんでした。赤ちゃんのころから、

ことばの先生がいました。赤ちゃんのころは、こえを出すれんしゅうをしました。ようち園に入るとものの名前のおべんきょうをしたり、おちやきゅうしよくをじょうずにたべたり、のんだりするれんしゅうをしました。小学校に入ると、人にじ分の気もちをつたえるれんしゅうをしたり、カードをつかってあい手にクイズを出してせつめいするれんしゅうをしています。先生が教えてくださいましたので、じ分がこまったときやたすけてほしいときに学校の先生やお友だちに気もちをつたえることができるようになりました。

わたしは、たくさんの先生がいろんなことを教えてくださいましたので、小学校でみんなといっしょにすすのがたのしいです。先生たちに、ありがとうの気もちでいっぱいです。



# 入賞作品

●小学生の部 優秀賞 — 「おじいちゃんとお訪問のかんごしさん」

小学生の部

優秀賞



春日市・小学5年  
下川 琴弓

## 「おじいちゃんとお訪問のかんごしさん」

私のおじいちゃんは何度も入院しています。入院するとお見まいに行っていますが、コロナウイルス感染症が流行しからは面会できなくなりました。私もさびしかったけど一人で病院にいるおじいちゃんももっとさびしいだろうなと

思っていました。

今年の二月に入院したとき、おじいちゃんは「もう入院はいやだ。家に帰りたい。」といました。困っていたらお医者さんが「手続きをしたらおうちで治りようすることもできますよ。」と教えてくれました。家にお医者さんやかんごしさんが来てしんさつしてくれるのでおじいちゃんは病院に行かずにすみ、私たちいつでも会うことができます。病院に相談するとソーシャルワーカーという人が訪問しんりようと訪問かんごのことの説明してくれて、退院することになりました。おじいちゃんが退院してきてすぐにお医者さんとかんごしさんが家に来てきました。胸の音を聞いたり血圧を測ったり病院と同じことをしたのですごくびっくりしました。だけどおじいちゃんはベッドの周りに好きな物をたくさん置いて、好きなテレビを見ながらニコニコしていたので病院にいるよりずっといいと思いました。

訪問かんごのかんごしさんは毎日来て、やさしく「気分はいかがですか」「今日は顔色がいいですね」と声をかけながらおじいちゃんのお世話をしてくれます。

訪問のかんごしさんはおじいちゃんのおかげです。話を聞いてくれて、まるでお見まいに来ているみたいです。いそがしそうにしている病院のかんごしさんとぜんぜんちがいます。だけどおじいちゃんの具合が悪くなった時に電話するとすぐに来てくれてお医者さんの指示を聞いて点滴をしてくれます。家族は訪問のかんごしさんの顔を見るとほっとした気分になるねと言っています。

私は時々おじいちゃんのお世話を手伝いますが、ねたまま体をふいたりシーツをかえたりするのはとても大変です。特にパジャマを着がえるときはやせてしまった首や手が折れないか心配になります。だけど訪問かんごしさんは話を聞きながらシーツのしわをのぼしたり、体の向きを変えたりするのでま法を使っているのかと思うくらいです。おじいちゃんもかんごしさんにもんくを言わないので、やさしくしてもらってうれいのだと思います。おじいちゃんのお世話は大変だけど、これからも訪問のかんごしさんに助けてもらいながら家族みんなで協力したいと思います。



# 入賞作品

●小学生の部 優秀賞 — 「びょういんってすごいな」

小学生の部

優秀賞



福岡市・小学2年  
松岡 夏希

## 「びょういんって すごいな」

わたしは、二〇一四年の六月二日に、福岡しにあるFびょういんで生まれました。

ふたごの姉妹もいっしょに生まれました。

した。よていより三ヶ月早く生まれたので、びょういんの中のNICUというおへやで、しばらく入いんしていました。

たいいんして、おうちにかえることができたのは、生まれてから一二九日たったときだとお母さんが、教えてくれました。

入いん中は、おうちの人が、びょういんにいられる時間は、朝十時からよるの八時までときまつていて、それいがいの時間は、おいしやさんやかんごしさんが、ずっとおせわをしてくれたいたと聞きました。

わたしはH先生にずっとようすを、見てもらいました。わたしがNICUの中でぐあいがわるくなつたときも、H先生が、ずっと体おんをはかつたりむねの音を聞いたたりそばにいてくれたりしたそうです。いつかおんがえしが

したいです。

いつもやさしくて、できるようになつたことがあると、よろこんでくれる、H先生が大好きです。

今からH先生におてがみを書きます。

H先生へ

生まれたときから今までずっとようすを見てくれてありがとうございます。先生のおかげでまい日元気にすごせています。年に一回先生にびょういんで会えるのがたのしみです。

また、お話しできるのをたのしみにしています。

なつきより

# 選考委員

福岡県教育委員会

坂田 祐也

西日本新聞社社会部編集委員

下崎 千加

筑紫女学園大学名誉教授

中村 萬里

福岡県医師会広報委員会委員長

箕田 政一郎

福岡県医師会副会長

堤 康博

福岡県医師会理事

西 秀博

福岡県医師会理事

青柳 明彦

福岡県医師会理事

原 祐一

福岡県医師会理事

星子 久

福岡県医師会理事

田中 耕太郎





# 募集要項

【開催趣旨】 医療従事者と患者さん、その家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて病気になった時に感じたことや介護にまつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関する体験記を募集、コンクールを行い、優秀作品を発表することで、県民、また医療関係者の医療に対する意識を高める。

【応募資格】 福岡県内の学校に在籍する児童及び生徒、および一般県民。

※医師を除く。

## 【部 門】

	①一般の部	②中高生の部	③小学生の部
文字数	400字詰め原稿用紙5枚 (2000字)以内	400字詰め原稿用紙5枚 (2000字)以内	400字詰め原稿用紙3枚 (1200字)以内
表彰	最優秀賞 1名 優秀賞 若干名	最優秀賞 1名 優秀賞 若干名	最優秀賞 1名 優秀賞 若干名

## 【応募方法】

1. 鉛筆(B、2B) / ボールペン / 万年筆 / パソコンのうち、いずれかを用いて、濃くはっきりと書く。※パソコンの場合、1ページ400字(20字×20行)。
2. 表紙をつけて、部門、題名、氏名(ふりがな)、性別、年齢(生年月日)、〒住所、電話番号(FAXがあればFAX番号も)、職業(または学校名・学年)を明記。

※応募上の注意

- 1) 自作の未発表作品に限ります。二重投稿は固くお断りします。  
応募作品について盗作等による著作権侵害の争いが生じても、主催者は責任を負いません。
- 2) 応募作品は返却いたしません。
- 3) 入賞作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。そのため、主催者、後援者が管理するウェブサイトや、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍、教材などに利用されることがあります。
- 4) 応募作品に誤字・脱字と思われる内容が認められた場合には、主催者が修正を加える場合があります。

---

【主催】 福岡県医師会  
【共催】 福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社(順不同)  
【後援】 九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会、北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社(順不同)



令和5年3月発行

公益社団法人福岡県医師会

〒812-8551 福岡県福岡市博多区博多駅南2-9-30  
電話：092-431-4564 F A X：092-411-6858





